

## 令和7（2025）年度 11月「歳時記」

11月は秋が深まり、冬の気配も感じられる季節です。古くから「霜月」と呼ばれ、朝夕に霜が降り始めます。紅葉は見頃を迎え、三段峡や龍頭峡、深山峡、筒賀の大イチョウなど、安芸太田町のあちらこちらで赤や黄の風景を楽しむことができます。空気が澄むので、散歩をしながら色づく木々を観察するのもおすすめです。まさに、行楽シーズン真っ直中です。

また、実りの季節でもあり、柿や栗、松茸といった秋の味覚が店先に並びます。肌寒さの中で温かい鍋料理や焼き芋を食べると、体も心もほっと温まります。冬に渡る野鳥の群れを見かけるようになるのも、この時期の自然の変化です。

今月は行楽シーズンということで、私の愛読書「徒然草」から、お出かけを題材にした第52段を選びました。先月までに続き、中学校2年生の学習内容です。

### <古文>

仁和寺にある法師、年寄るまで岩清水を拝まざりければ、心うく覺へて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩より詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て歸りにけり。

さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。

### <口語（現代語訳）>

仁和寺にいる法師が、歳を取るまで岩清水八幡宮を参拝に行ったことがなかったのもので、残念なことに思われて、ある時に思い立って、たった一人で徒歩で参詣した。極楽寺や高良神社などを参拝して、これだけのものと思い込んで帰っ

てきた。

さて、仲間に向かって、「長年の間、思っていたことを果たしてきました。うわさに聞いたのよりも勝って、尊いものでした。それにしても、参拝している人がそれぞれ山に登っていたのは、何事があったのだろうか、と知りたかったけれど、神に参拝するのが本来の目的だと思って、山までは見ませんでした。」と言った。

少しのことにも、その道の先導者があってほしいものである。

鎌倉時代の末に、兼好法師によって書かれた「徒然草」は、「枕草子」と並び日本の代表的な随筆文学です。自然や人間についての鋭い考えや感想、見聞が書きつづられ、無常観に基づく人生観や美意識が読み取れます。第52段について、読み取った内容を自分の経験と結び付けながら、兼好法師のものの見方について考えていくのも面白いのではないのでしょうか。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
＊練習問題

- 1 波下線部「年ごろ思ひつること」とは、どのようなことでしょうか。現代語で書きましょう。
- 2 波下線部「尊くこそおはしけれ」に用いられている表現について、次の空欄に当てはまる言葉を書きましょう。  
この部分は「こそ」という(①)があることで、文末の「(②)」が「けれ」に変化している。このような古典の表現を(③)といい、ここでは「尊く」という語が強調されている。
- 3 波下線部「何事かありけん」とありますが、何を見てこう思ったのでしょうか。古文中から十三字で見つけましょう。
- 4 波下線部「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」とありますが、ここではどのようなことを言っているのでしょうか。五十字以内でまとめましょう。

＜解答例＞

- 1 いわしみすはちまんぐうさんぱい 石清水八幡宮に参拝すること。      2 ①じょし 助詞    ②けり    ③かかむす 係り結び
- 3 まいひとやまのぼ 参りたる人ごとに山へ登りし
- 4 ほんのちいさなことであっても、そのみちせんどうしゃひと 道の先導者となる人がいてくれれば、しっぱい 失敗しないですむということ。

あき おおたちょうきょういくいいんかい きょういくちょう おおの まさと  
安芸太田町教育委員会 教育長 大野 正人